

目指す学校像	◆子どもたちが生き生きと輝く学校 ◆地域とともに発展する学校	◆教職員と保護者・地域がチームとなる学校 ◆職員みんなが力を発揮する学校
重点目標	1 教育DX(デジタルトランスフォーメーション)で実現させる学びの自律と個別最適化、探究化 2 一人ひとりの多様な幸せ(Well-being)を実現する未来の教育の実現 3 地域の高い教育力を生かしたコミュニティ・スクールの推進 4 子どもの可能性を最大限に伸ばす教職員の資質向上研修の充実	

※重点目標は4つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目は複数設定可。
※番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。

達成度	A	ほぼ達成 (8割以上)
	B	概ね達成 (6割以上)
	C	変化の兆し (4割以上)
	D	不十分 (4割未満)

年度		学校自己評価			年度評価		学校運営協議会による評価	
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策	
1	(現状) ○全国学力・学習状況調査や市の学習状況調査では、国語、算数ともに全国、市平均と比べ概ね良好な結果である。 ○日頃の学習の様子から、学級には、様々な特性をもつ児童が存在することから、学習指導上、誰一人取り残すことなく、配慮を要する児童へのきめ細かな指導が必要である。 (課題) ○学級には、【浅い】理解から【深い】理解までの多様な児童が存在する中で、特に習熟の差が生じやすい教科等において、個別最適な学習の実現に課題がある。 ○習得・活用の「活用」場面で、協働学習から学習の有用性を実感させ、学習意欲を向上させる必要がある。	・誰一人取り残さない多様な子どもの学びの充実 ・学びの自律化・探究化に向けた情報端末の活用、授業改善	①「焦点化・視覚化・共有化」の視点から授業改善を行う。 ②スタディサプリ、ドリルパークなどのICT教材を活用する。 ③学習活動の基盤となる読解力をはぐくむため、読書活動を推進する。	①「授業が分かりやすい」と回答する児童の割合が95%以上となったか。 ②スタディサプリ、ドリルパークを日常的に使いこなせたか。 ③学校図書館での貸し出し冊数データを分析し、児童が日常的に読書に親しめたか。	①「授業の内容がよく分かる」は、児童の肯定的回答94.5% ②スタディサプリの日常的利用は、3～6年担当教員の肯定的回答12.5% ドリルパークの日常的利用は、1～6年担当教員の肯定的回答27.3% ③1・2学期の貸し出し冊数、全学年で17,013冊(1人約18.7冊、1月2冊)	C	・「授業の内容がよく分からない」と回答している児童に注目し、誰一人取り残さない学習指導の改善が必要 ●日常的な読書や、親子の交換日記、ドリルパークやスタディサプリの活用の取組の検討。発見学習に加え、教えて考えさせる授業等、他の指導方法の検討。	学校運営協議会からの意見・要望・評価等 ●学校を訪問し、授業を参観すると、「学ぶことが楽しい」と感じる授業が展開され、先生方はとてもよく頑張っている。達成度が「C」となっているが、先生方の頑張りをもっとアピールした方がよい。 ●先生方は、一人の人格の完成を目指し、学習だけでなく、全人的な教育を施してくださり、非常に感謝している。子どもをその気にさせ、モチベーションを上げていく先生方の努力に敬意を表する。 ●校長の熱意・熱量の大きさを感じる。今後も、期待している。
2	(現状) ○不登校や不登校傾向の児童、様々な特性をもつ児童、様々な配慮を要する児童など、多様化している。 ○現在の教室の中にある多様性を、主として、学級担任1人が、児童への指導に当たっている。 (課題) ○コロナ禍や、社会情勢に対するストレスや不透明感、生活の変化が児童の心身に与える影響が大きいことから、今後も、児童一人ひとりの状況を的確に把握し、適切なタイミングで組織的に支援・相談していく体制、仕組みづくりが課題である。 ○本校の「不登校や不登校傾向の子どもたちの居場所となる教室」の体制、仕組みづくりが課題である。	・児童一人ひとりへの細やかな教育支援・相談に向けた校内体制の充実 ・エイジェンシーを育成する特別活動等の充実	①生徒指導委員会等において子どもの様子を全職員で共有し、ケース会議等組織的な対応の充実により、個に応じたきめ細やかな支援を行う。 ②「不登校や不登校傾向の子どもたちの居場所となる教室(校内教育支援センター)」の体制、仕組みづくりを行う。	①情報共有・共通理解を図った子どもについて、生徒指導主任・教育相談主任・特別支援教育コーディネーターが中心となり、担任のみに抱え込まず、組織的な支援が日常的に実践できたか。 ②校内教育支援センターの設置のための体制、仕組みづくりを9月までに行うことができたか。	①実践的・専門的職員の高い指導者を招聘し、全職員で指導力の向上を図り、チームで指導に当たり、良好な変容が見られた。 ②9月に、校長室隣の会議室1を「Sola る一む」として開設。人的支援として、加配教員・SAを配置。低・中・高学年合わせて複数の児童が登校できるようになり、一部、学級への復帰もできるようになった。	B	・不登校や不登校傾向の児童、様々な特性をもつ児童、様々な配慮を要する児童など、多様な児童を誰一人取り残さない指導を充実深化させる。 ・「Sola る一む」に配置する教員の確保は、全学的な課題である。 ●充実深化させるための組織的な支援につなげる児童理解の会を定期開催。 ・自分たちの学校生活を見つめ直し、潤いある豊かな学校を自分たちの手で実現させていく自治的活動の深化 ●「学校が楽しい」と子どもが感じるには、教員自身も「職場が楽しい」と感じられるゆとりが必要であると考える。つばさ小の校風を全職員で創造する気概・矜持の醸成を図る。	●子どもは「先生に相談してくる」と言い、子どもとの信頼関係がよく築けていると感じる。 ●一方で、「先生は忙しい」「先生との時間が少ない」とも、子どもは話している。学校が担う役割が増大し、ゆとりが無くなり、心身の疲弊が心配である。 ●インドを訪問し、世界の教育と比較すると、日本の教育・つばさの教育は素晴らしい。 ●「仲良く」「楽しく」もよいが、「強く」「たくましく」強いリーダー性もはぐくみたい。 ●多様な個性があり、その子なりのよさを伸ばしていきたい。
3	(現状) ○登下校の見守り活動や、チャレンジスクール等の学校支援活動など、自治会・育成会・PTAを中心としたスクールサポートネットワークからの支援を得ながら、地域学校協働活動が充実している。 (課題) ○つばさ小学校の子どもたちに「付きたい力」を、全児童・保護者・地域と共有し、さらに、実現に向けた具体的行動を起こす。	・保護者・地域との連携、協働による「付きたい力」を育成する教育活動の展開 ・故郷を愛し、未来の地域社会の担い手となる子どもの育成に向けた取組の充実	①「付きたい力」を、全児童・保護者・地域と共有し、保護者・地域の役割と具体的な取組について明確化する。さらに、活動推進のため、学校HPにコミスクのページを開設・活用する。 ②「(仮称)つばさ小サポーターズ」による教育活動への支援を得る。	①学校HPにコミスクのページを開設するとともに、学校だより等を通じて、その更新状況が周知され、保護者・地域の日常的な取組に生かされたか。 ②「(仮称)つばさ小サポーターズ」の体制が整い、学校・家庭・地域が一体となって、教育活動の充実が図られたか。	①令和5年度、学校HPにコミスクのページを開設。授業参観・懇談会で、校長から学校自己評価システムシート等のビデオ説明。「付きたい力」の取組を文書で周知。 ②年度当初、「つばさ小サポーターズ」として、それぞれのボランティアを統括する構想を練ったが、適時、適切なボランティアを募集し、絶大なご協力・ご支援を得た。	A	・コミュニティ・スクールとして、学校の裁量権が拡大したことから「より多くの自主的な取組」が求められている。その具体化に課題。 ●学校・家庭・地域が一体となった魅力ある学校づくりへの参画について、より具体的に検討し、実践していく。 ・未来の地域社会の担い手となる子どもの育成の充実。 ●さいたま市立学校が、フレンドリー団体として登録されたことから「認知症サポーター養成講座」を教育課程に位置付ける。	●つばさ小の学校地域連携コーディネーターは、とても素晴らしい。地域として、とても感謝している。 ●チャレンジスクールで、地域の方々と触れ合い、多様な体験を積むと共に、自ら学ぶ姿が育っている。 ●学校に登校しづらかった子が、チャレンジをきっかけに来られるようになった。 ●大宮北高校生との交流など、土曜チャレンジがとても充実している。
4	(現状) ○新たな学びのスタイルの中心となる、GIGA端末をはじめとしたICTの活用方法について、エヴァンジェリストが中心となり研修を重ねてきた。 ○高学年での教科担任制実施により、担当する教科について、より深い教材研究を行うことができてきた。 (課題) ○GIGA端末の効果的な活用について、定期的に情報交換を行い、学級差を生じさせない取組が必要である。 ○授業準備等を効率的に行い、7時間45分勤務で業務を終了できる職場づくりが課題である。	・学校職員一人ひとりが力を発揮し、子どもの可能性を最大限に伸ばす教職員の資質向上研修の実施	①全ての教員が授業改善に取り組み、学期に1回以上、授業を公開する。 ②GIGA端末を効果的に活用する指導方法について、定期的に全職員で学ぶ。 ③「研修履歴を活用した対話に基づく受講奨励」を適切に行い、教職員の資質向上を図る。	①全ての教員がGIGA端末を効果的に活用した【授業改善】に取り組み、学期に1回以上、授業を公開し、学習指導力の向上が図られたか。 ②GIGA端末を活用した指導について、月に1回以上の情報交換ができたか。 ③校長自ら学び、先進的な情報を集め、学校内で共有を図るなどを通して、教職員の資質向上が図られたか。 ④教職員が生き生きと元気に働く職場が実現でき、学校外において力量等が涵養できたか。	①学期に1回以上の「4.5分授業公開」に取り組み、互いに授業を見合うことを通じて、学習指導力の向上が図られた。 ②定期的に、研修の時間を設定し、「端末を活用した指導」について情報交換を実施。教育研究所の指導主事を招聘し、ICT活用の実技研修を複数回行った。 ③校長自ら週休日や夜間に行われた自主的研究会に参加し、全国の学校職員との交流等から得られた情報等について、職員集会を利用し、つばさ小職員への共有ができた。 ④子どもが元気になるには、職員が生き生きと働ける職場環境が必要であるが、働き方改革の達成度は不十分な状況である。	B	・子どもや教員自身が、自分の学校を誇りに思い、学校のブランド力・特色・自慢などを自分の言葉で語れるようになること。 ・パーパス実現に向けたバリューとして、自己研鑽・研修への志を全職員一人ひとりがもつこと。 ●自ら主体的に研修に取り組みなければ、自己改善にはつながらないと考える。その実現のために「職場環境の改善」と「学校で働くことを志願した当初の夢を基に、つばさ小のパーパスの醸成」に取り組む。	●「仕事が大変だ」という面が前面に出すぎている。「ある程度仕事が大変であること」は、どの職業も同じ。先生方の「教職」という仕事は、別格であると考える。「教職」という仕事に「誇り」をもち、「夢」を大きくもち、「教えること」をもっともっと楽しんで欲しい。 ●小中連携を更に深め、小中が互いに授業を見合い、磨き合っていくようにしたい。 ●わかさ色のつばさ小の特色ある学校づくりに期待している。